

## 第12章 原の辻閨繰遺跡調査報告補遺

宮本一夫

原の辻閨繰遺跡は、1954（昭和29）年の東亜考古学会によって調査された弥生時代の墓地遺跡であるが（図141）、その後、1995（平成7）年に長崎県教育委員会によって同じく弥生時代の墓地遺構が発見された（長崎県教育委員会2002）。これら二つの墓地遺構の間は約150m離れているが、一連の墓地遺構であり、石棺墓と甕棺墓からなるものである（図141）。石棺墓が成人埋葬用墓で、甕棺墓が小児用甕棺である。甕棺の土器型式からは、東亜考古学会調査のものが弥生前期末から中期前半であり、長崎県教育委員会調査のものが須玖Ⅰ・Ⅱ式の弥生中期後半を主体とするものである。東亜考古学会調査位置の墓群から長崎県教育委員会の墓群へと相対的に墓地が移動しているようにみえる。

1954年第3次原の辻調査である閨繰遺跡については、既に調査報告書を出版している（宮本ほか2018）。この度の原の辻遺跡東亜考古学会第1～第5次調査の再整理時に、第3次調査の閨繰遺跡調査の不明土器と不明管玉を再発見するに至った。そこでその内容を報告するものである。

1954年の閨繰遺跡では、土木工事に際して箱式石棺10基と甕棺6基が発見されたところから、遺跡の記録保存のための緊急調査が1954年3月～4月にかけて実施されたものである。発掘調査では、箱式石棺墓6基と甕棺墓16基が検出されている（図142）。この内、不明であった管玉4点（図143、図版74-4、表16）が発見された。759が4号石棺墓出土、760が5号石棺墓出土のものである。碧玉製で片面穿孔のもので、4号墓のものが比較的大型の管玉である。4号墓と5号墓の管玉はともに青色味が強く光沢をもつ石材であり、朝鮮半島系管玉である可能性がある。一方、8号甕棺墓からは比較的小型の碧玉製管玉2点出土している。同じく片面穿孔である。8号甕棺墓は城ノ越式の甕棺であり、12号甕棺墓などとはほぼ同じ時期である。これらは、4・5号墓のものに比べ青色味はみられず、緑色をなすもので、761は波状の節理が認められる特徴的な碧玉である。761と762はともに日本産のもので



図141 原の辻閨繰遺跡の墓葬分布

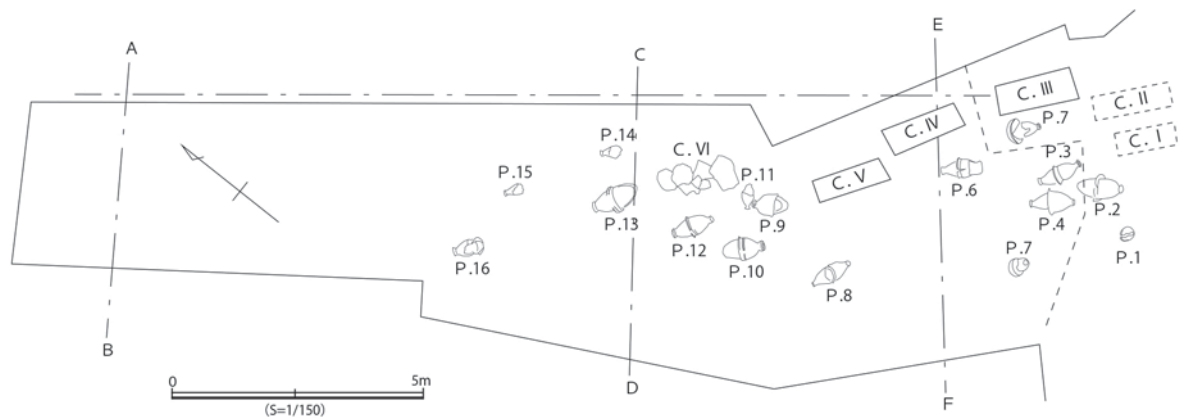


図142 東亜考古学会調査区の墓地

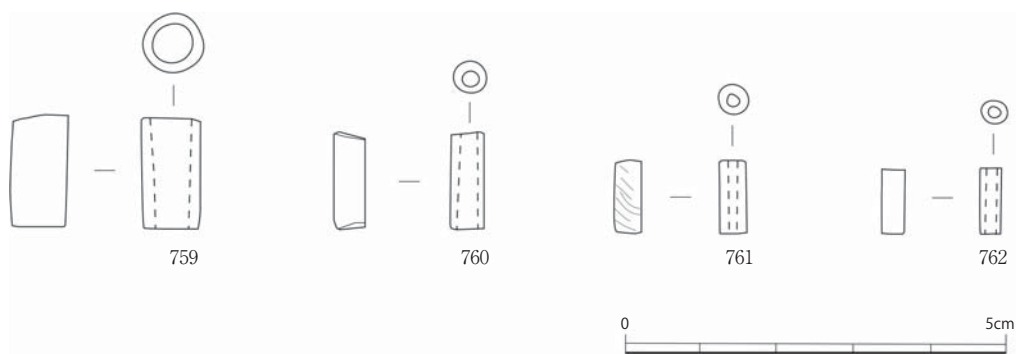


図143 第4・5号石棺墓、第8号甕棺墓出土管玉

表16 原の辻間線遺跡出土管玉一覧

番号	器種	色調	長さ (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	出土墓葬
759	管玉	青味の強い緑色	14.0	7.5	4.5-4.0	4号石棺墓
760	管玉	青味の強い緑色	13.0	4.0	2.5-2.0	5号石棺墓
761	管玉	緑色	9.5	4.0	1.5-1.0	8号甕棺墓
762	管玉	緑色	9.0	3.0	1.5-1.0	8号甕棺墓

あろう。

この他、12号甕棺墓の上甕が2018年の報告時には不明であった。この度発見された12号甕棺墓の上甕（図144-763）は、亀の甲タイプの口縁が肥厚し頸部に突帯をもつもので、弥生前期末～中期初頭の城ノ越式である。類似した形態の甕は、16号墓の下甕に認められる（宮本編2018、図18-39）。12号墓の下甕（図144-764）は如意形口縁をなし、底部は上げ底である板付Ⅱc式から城ノ越式の特徴を示す。

## 参考文献

宮本一夫・梶原慎司・福永将大2018「原の辻間線遺跡の発掘調査」『壱岐原の辻間線遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳―東亜考古学会壱岐春の辻遺跡調査報告書Ⅰ―』九州大学人文科学研究院考古学研究室、1-32頁  
長崎県教育委員会2002『間線遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集

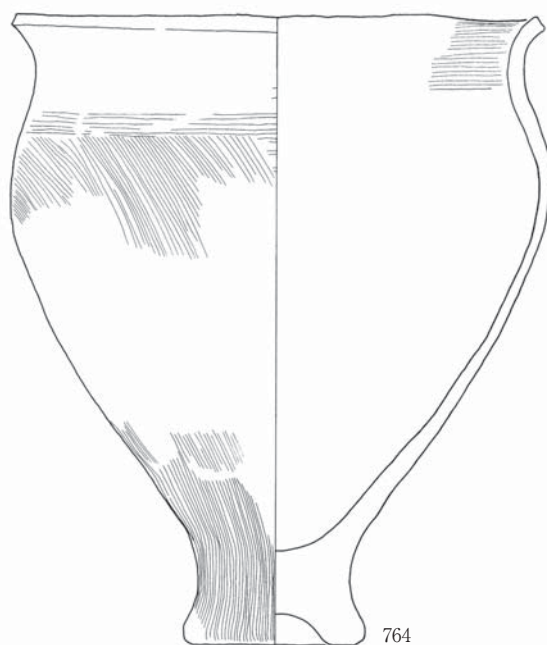
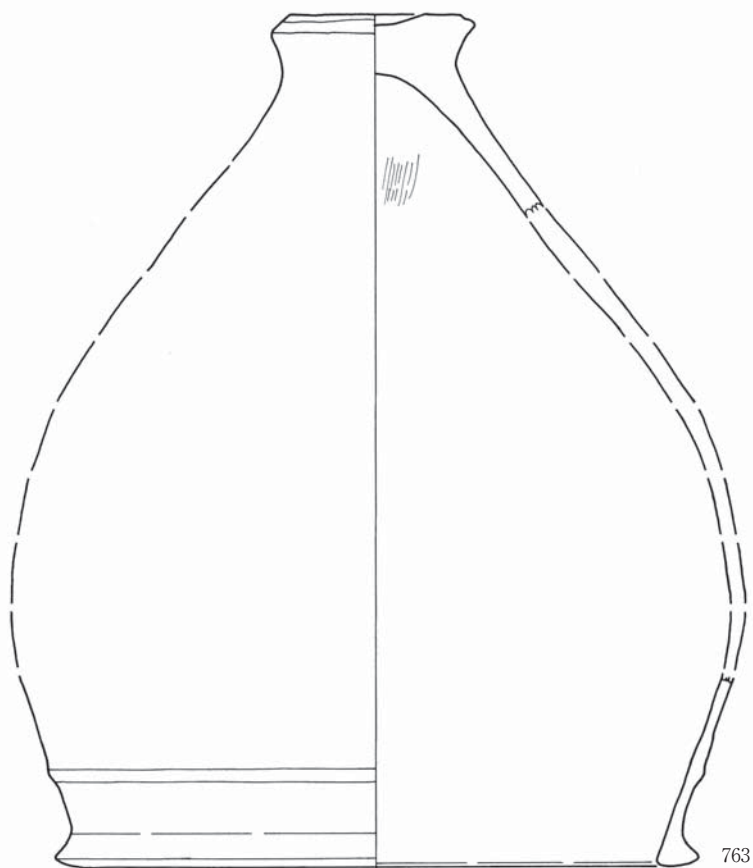


図144 原の辻閨線遺跡12号甕棺